

<原 著>

脅威モニタリング尺度の作成および信頼性・妥当性の検討

熊谷 真人* 荒木美乃里* 富田 望*
黒田 彩加* 樋沼 友子* 熊野 宏昭**

要 約

メタ認知療法(MCT; Wells, 2008)において, 精神疾患の維持・増悪要因の1つに脅威モニタリングがある。脅威モニタリングとは, 「脅威関連の刺激に注意を固着させるといった注意バイアス」と定義されている(Wells, 2009 熊野他監訳, 2012)。従来の研究において, 脅威モニタリングを測定する自己記入式の質問紙は作成されていない。そこで本研究では, 自己記入式の脅威モニタリング尺度を作成し, その信頼性と妥当性を検討することを目的とした。因子分析の結果, 「脅威の探索」, 「脅威への注意の促進」, 「脅威からの注意の転換の困難」の3因子が抽出された。尺度全体ならびに各因子は十分な内的整合性と構造的妥当性が示された。しかし課題として, 構成概念妥当性の検討が不十分であったこと, 得点の偏りが見られたことが挙げられる。そのため, 今後は項目内容の改訂を実施し, 尺度を再検討する必要がある。

キーワード: メタ認知療法, 脅威モニタリング, 注意バイアス

問題と目的

認知情報処理論において, 不安障害の発症, 維持要因と考えられる注意方略の1つとして環境刺激に対する注意バイアスがある(松本, 2006)。注意バイアスとは, 「情報の入力段階で引き起こされ, 外界の脅威情報を選択的に入力しやすくなる現象」と定義される(松本, 2006)。注意バイアスには3つの異なる形態があり, それぞれ「脅威への注意の促進(facilitated attention)」, 「脅威からの注意の転換の困難(difficulty in disengagement)」, 「脅威の回避(attentional avoidance)」と定義される(Cisler & Koster, 2010)。

従来の注意バイアスの研究では, ドット・プローブ課題や情動ストロープ課題といった神

経心理課題を用いての検討が多くなされてきた(Cisler & Koster, 2010)。これらの神経心理課題を用いた研究では, 自動的な注意バイアスについて検討したものが多い(大友・上野・松嶋・丹野, 2008; Schneider, Dumais, & Shiffrin, 1984)。一方, 注意バイアスの処理様式については, 能動的な注意バイアスの存在も示唆されている(Wells & Matthews, 1994 箱田・津田・丹野 監訳, 2002)。Cisler & Koster (2010) では, 注意バイアスは形態によって, それぞれ処理様式が異なるとされている。「脅威への注意の促進」の方略は自動的な注意バイアスであると示唆されており, 「脅威からの注意の転換の困難」と「脅威の回避」の方略は能動的な注意バイアスであると示唆されている(Cisler & Koster, 2010)。

能動的な注意バイアス方略を制御する要因の1つとして, メタ認知の存在が示唆される

* 早稲田大学大学院人間科学研究科

** 早稲田大学人間科学学術院

(Wells & Matthews, 1994 箱田他 監訳, 2002)。メタ認知とは、認知の内容に適用する認知であり、思考や認知の内容を監視、制御、評価する高次の認知機能である (Wells, 2009 熊野・今井・境 監訳 2012)。認知を制御するメタ認知に着目し、精神疾患にアプローチする心理療法の1つに、メタ認知療法 (Metacognitive Therapy: MCT) がある (Wells, 2008)。

MCT とは、不適応なメタ認知的信念の変容や注意機能の柔軟性の向上を介して、認知注意症候群 (Cognitive Attention Syndrome: CAS) にアプローチする治療法である (今井・今井, 2011)。CAS の構成要素の1つに脅威モニタリングがある (Wells, 2006)。脅威モニタリングは、「脅威関連の刺激に注意を固着させるといった注意バイアス (Wells, 2009 熊野他 監訳, 2012)」や「対処の手段として、内的もしくは外的な脅威やネガティブな情報に注意を集中すること (Wells, 2008)」などと定義される。

脅威モニタリングには注意バイアスとは異なる形態が存在する。例えば、強迫性障害 (Obsessive Compulsive Disorder: OCD) や心的外傷後ストレス障害 (Posttraumatic Stress Disorder: PTSD) などの精神疾患においては、脅威の兆候や潜在的な脅威に対して能動的に注意を向け、結果的に現在の危機感を増大させることが示唆されている (Wells, 2009 熊野他 監訳, 2012)。このことから、脅威モニタリングの形態に、「脅威の探索 (脅威関連刺激のない日常生活場面で、脅威刺激やその兆候を意図的に探索すること)」が存在すると考えられる。また、心気症 (Hypochondriasis) における脅威モニタリングは、自分の身体状況や精神機能の確認や身体症状のスクランなどといった方略を取るとされている (Wells, 2009 熊野他 監訳, 2012)。そして、「危険に注意を向けることで気を落ち着かせることができる」や「危険に焦点を当てることで、私は無事でいられる」などといったメタ

認知的信念の存在が示唆されている (山口・熊野, 2014; Wells, 2009 熊野他 監訳, 2012)。このことより、従来は自動的であると考えられていた「脅威への注意の促進」についても能動的な側面があることが示唆されている。また、脅威モニタリングの定義の1つに、「脅威関連の刺激に注意を固着させるといった注意バイアス (Wells, 2009 熊野他 監訳, 2012)」とあることより、注意バイアスの形態である「脅威からの注意の転換の困難」が脅威モニタリングの形態としても考えられる。

MCT において脅威モニタリングは、精神疾患の維持・増悪要因の1つとされており、メタ認知を介して変容が促される概念である。しかし脅威モニタリングを測定する自己記入式の質問紙はこれまでに開発されておらず、脅威モニタリングと精神疾患の関連の検討は未だ不十分であると考えられる。脅威モニタリングを測定する尺度を作成することにより、様々な精神疾患のメタ認知的因果モデルの精緻化が可能になると考えられる。そこで本研究では、自己記入式の脅威モニタリングを測定する質問紙の作成を行い、その信頼性と妥当性の検討をすることを目的とする。

方 法

調査対象者

首都圏の4年制私立大学に通う大学生 464 名を対象として調査を実施し、有効回答 206 名 (男性 92 名, 女性 102 名, 性別未記入 12 名, 平均年齢 20.43 ± 1.30 歳, 有効回答率 44.40%) を分析対象とした。

調査手続き

本調査は複数の大学教員に協力を依頼し、講義終了後の教室で質問紙調査を実施した。また、研究者の所属する早稲田大学公認サークルに対して、代表者の許可を得て質問紙の配布を

実施した。

調査材料

1) 脅威モニタリング尺度の原版：本研究で作成を試みる尺度である。臨床心理学を専攻する大学院生1名と大学生1名で、先行研究（Cisler & Koster, 2010; 今井・熊野・今井・根建, 2015; Wells, 2009 熊野他 監訳, 2012; 山形・高橋・繁橋・大野・木嶋, 2005; 山口・熊野, 2014）を参考にして原項目を作成した。「脅威の探索」「脅威への注意の促進」「脅威からの注意の転換の困難」の3因子構造を想定している。30項目から構成され、1（あてはまらない）～6（あてはまる）の6件法で回答を求めた。

回答に関する教示文は、尺度全体に対する教示文とそれぞれの下位因子ごとの教示文を記載した。尺度全体に対する教示文では、回答者が怖いと感じるものについての項目を選択する。項目は、「人物（厳しい先輩、苦手な友人など）」「対人場面（他人と交流する場面、発表場面など）」「自身の感情（悲しみ、不安など）」「自身の身体状況（動悸、腹痛など）」「過去のトラウマ体験（事故、大きな失敗など）」「場所（人ごみ、電車内など）」「汚いと感じるもの、不吉と感じるもの」「その他（自由記述）」とした。また、項目選択の際、生命の危険を感じるものや過度の嫌悪感が生じるものは対象外とした。その後、最も頻繁に怖いと感じるものを記入し、その後の下位尺度ごとの教示文・項目に出てくる“X”に当てはめて回答してもらうようにした。下位因子ごとに対する教示文は、「脅威の探索」では、「普段の日常生活場面において“X”に対して、どのような注意の向け方をしていますか？」とした。「脅威への注意の促進」では、「“X”が現れたとき、どのような注意の向け方をしますか？」とした。「脅威からの注意の転換の困難」では、「“X”が現れて数秒経過したとき、どのような注意の向け方をしますか？」とした。

2) フェイスシート：回答者の性別と年齢を尋ねた。

3) 能動的注意制御尺度（Voluntary Attention Control Scale: VACS; 今井他, 2015）：能動的な注意制御機能を測定する尺度。「選択的注意」「転換的注意」「分割的注意」の3因子構造で構成されている。注意制御機能を向上させることによって、CASの減弱を促進するとされている（今井他, 2011）。このことより、注意制御機能と脅威モニタリングの間には関連があることが考えられる。18項目から構成され、1（全くあてはまらない）～6（非常にあてはまる）の6件法で回答を求めた。高い信頼性と妥当性を有しており、本研究では構成概念妥当性の検討のために使用した。

4) Penn State Worry Questionnaire 日本語版（PSWQ; 本岡・松見・林, 2009）：心配の程度を測定する尺度。心配は未来志向的な反復的思考であるとされる。CASの要素は自己注目によって特徴づけられるという共通点があり、反復的思考と脅威モニタリングは関連があると考えられる。16項目から構成され、1（全く当てはまらない）～5（非常に当てはまる）の5件法で回答を求めた。高い信頼性と妥当性を有しており、本研究では構成概念妥当性の検討のために使用した。

5) ネガティブな反すう尺度（Negative Rumination Scale: NRS; 伊藤・上里, 2001）：ネガティブな事象に対する反芻の程度について測定する尺度。反芻は過去志向的な反復的思考であるとされる。心配と同様、反芻も自己注目によって特徴づけられ、脅威モニタリングとの間に関連があると考えられる。14項目から構成され、1（あてはまらない）～6（あてはまる）の6件法で回答を求めた。分析にはダミー項目を除いた11項目を使用した。高い信頼性と妥当性を有しており、本研究では構成概念妥当性の検討のために使用した。

Table 1 構成概念妥当性に関する仮説

	脅威モニタリング 尺度	脅威からの注意の 転換の困難	脅威への 注意の促進	脅威の探索
VACS ¹⁾	中程度の 負の相関	—	—	—
選択的注意	—	弱い負の相関	中程度の 負の相関	弱い負の相関
転換的注意	—	中程度の 負の相関	弱い負の相関	弱い負の相関
分割的注意	—	弱い負の相関	中程度の 負の相関	中程度の 負の相関
PSWQ ²⁾	中程度の 正の相関	中程度の 正の相関	弱い正の相関	中程度の 正の相関
NRS ³⁾	中程度の 正の相関	中程度の 正の相関	中程度の 正の相関	弱い正の相関
STAI-T ⁴⁾	中程度の 正の相関	中程度の 正の相関	中程度の 正の相関	中程度の 正の相関

Note: ¹⁾ VACS: Voluntary Attention Control Scale, ²⁾ PSWQ: Penn State Worry Questionnaire,

³⁾ NRS: Negative Rumination Scale, ⁴⁾ STAI-T: State Trait Anxiety Inventory – Trait

6) State-Trait Anxiety Inventory 日本語版 (STAI; 清水・今榮, 1981) の下位尺度「特性不安」: 特性不安の程度について測定する尺度。脅威刺激に対する注意バイアスは不安を維持する要因とされている。このことより注意バイアスと類似した概念である脅威モニタリングと特性不安には関連があることが考えられる。20 項目から構成され、1 (決してそうではない) ~ 4 (いつもそうである) の 4 件法で回答を求めた。高い信頼性と妥当性を有しており、本研究では構成概念妥当性の検討のために使用した。

また、1) の尺度と構成概念妥当性を測定する尺度との間には、Table 1 のような関連があることを想定した。

分析方法

HAD version 14.00 (清水, 2016) を用いて探索的因子分析を行い、SPSS version 21 (IBM, New York, USA) を用いて項目分析、内的整合性、構成概念妥当性の検討、尺度全体ならびに

各下位尺度の得点分布の確認、Amos version 21 (IBM, New York, Japan) を用いて構造的妥当性の検討を行った。

倫理的配慮

本調査は早稲田大学における「人を対象とする研究に関する倫理委員会」の承認を得て実施した (承認番号: 2015-110)。

結 果

項目ごとの平均値と標準偏差を算出し、天井効果と床効果の検討、並びに尖度と歪度の検討を行った結果、削除対象になる項目はなかった。また、I-R 相関分析より、脅威モニタリング尺度の各項目と該当項目以外の項目の合計得点の相関係数を算出した。その結果、相関係数の低かった ($r < .200$) 3 項目を削除した。その後、項目間の相関係数や内容的妥当性の検討の結果、他の項目との共通性が見られた 10 項目

Table 2 脅威モニタリング尺度の探索的因子分析

項目	因子負荷量		
	I	II	III
I. 「脅威からの注意の転換の困難」 ($\alpha = .903$)			
26 "X"から意識をそらすことができない。	.910	.037	-.111
25 "X"に注意を向けてしまうと、周囲の状況を意識できなくなる。	.884	-.164	.137
23 "X"に注意を向けると、今までやっていたことに注意を向け直すことができない。	.743	.110	-.046
27 一旦"X"から意識をそらしても、気が付くとまた目を向けてしまう。	.710	.169	.033
II. 「脅威への注意の促進」 ($\alpha = .847$)			
14 "X"に対して敏感になる。	.053	.810	.034
11 "X"が現れると、そちらに注意を向ける。	-.030	.757	.020
18 現れた"X"に対して注意を払う。	.110	.649	.045
III. 「脅威の探索」 ($\alpha = .855$)			
3 "X"の出現に対して準備している。	-.127	.015	.854
5 "X"が出現するのではないかと心配する。	.046	.092	.716
2 "X"が現れるかもしれない状況を探す。	.169	-.115	.695
8 "X"が現れるのに備えて日頃から警戒している。	-.036	.111	.672
因子間相関			
第1因子 「脅威からの注意の転換の困難」	—	.678	.523
第2因子 「脅威への注意の促進」		—	.649
第3因子 「脅威の探索」			—

を削除した。

残りの17項目に対して、最尤法による探索的因子分析を実施した。3因子まで固有値の値が1以上であったことが確認されたため、カイザー基準により3因子構造であると解釈した。その後、再度最尤法プロマックス回転による因子分析を行った。多重負荷が認められる項目と因子負荷量が0.4未満の項目を順に削除していった結果、6回の反復で結果が収束した。第

1因子が4項目、第2因子が3項目、第3因子が4項目の計11項目が抽出された。第1因子は、脅威刺激が出現した後、その刺激から別の対象に注意を移すことが困難であるといった項目に負荷量が大きかったため、「脅威からの注意の転換の困難」と命名した。第2因子は、脅威刺激が出現した状況で、その刺激に注意を向ける項目や確認をする項目に負荷量が大きかったため、「脅威への注意の促進」と命名した。

第3因子は、脅威刺激のない状況で、その出現や周囲の状況に対して注意を向ける項目や心配する項目に負荷量が大きかったため、「脅威の探索」と命名した。また、下位因子間の関連性を検討するため、Pearsonの積率相関係数を算出した。その結果、各下位因子間に、有意な中程度の正の相関が示された。探索的因子分析によって抽出された11項目と因子負荷量および因子間相関をTable 2に示す。

脅威モニタリング尺度の内的整合性を検討するため、各下位因子と尺度全体についてCronbachの α 係数を算出した。その結果、第1因子は $\alpha = .903$ 、第2因子は $\alpha = .847$ 、第3因子は $\alpha = .855$ であった。また、尺度全体では、 $\alpha = .907$ であった。

探索的因子分析によって得られた因子構造の構造的妥当性を検討するため、確証的因子分析を実施した。モデル適合度の指標として、GFI (Goodness of Fit Index), AGFI (Adjusted GFI), CFI (Comparative Fit Index), TLI (Tucker-Lewis Index), RMSEA (Root Mean Square Error of Approximation), SRMR (Standardized Root

Mean square Residual)を用いた。各指標はそれぞれ0～1の値をとり、GFI, AGFI, CFI, TLIの値は1に近似するほど望ましく、RMSEA, SRMRは0に近似するほど望ましいとされる(朝野・鈴木・小島, 2005; 田部井, 2011)。その結果、GFI = .922, AGFI = .875, CFI = .958, TLI = .944, RMSEA = .079, SRMR = .048, と概ね許容できる適合度を示した。また、各因子から各項目へのパス係数は、全て1%水準で有意であった。

構成概念妥当性の検討については、脅威モニタリング尺度の各下位因子と、PSWQ, NRS, STAI-T, VACSとの間のPearsonの積率相関係数を算出した(Table 3)。VACSの下位因子の「選択的注意」、「転換的注意」と、「脅威からの注意の転換の困難」との間にはそれぞれ有意なごく弱い負の相関と有意な弱い負の相関が示された。しかし、分割的注意との間に有意な相関は示されなかった。また、VACSの各下位因子と「脅威への注意の促進」「脅威の探索」の間には有意な相関は示されなかった。PSWQは「脅威からの注意の転換の困難」「脅威の探索」と

Table 3 脅威モニタリング尺度と構成概念妥当性の検討に用いた尺度との相関係数

	脅威モニタリング 尺度	脅威からの注意 の転換の困難	脅威への 注意の促進	脅威の探索
VACS ¹⁾	-.101	-.184**	.046	-.070
選択的注意	-.092	-.175**	.029	-.058
転換的注意	-.135	-.214**	.023	-.107
分割的注意	-.037	-.102	.072	-.009
PSWQ ²⁾	.512**	.449**	.327**	.489**
NRS ³⁾	.462**	.484**	.295**	.385**
STAI-T ⁴⁾	.375**	.386**	.186**	.331**

** $p < .01$ * $p < .05$

Note: ¹⁾ VACS: Voluntary Attention Control Scale, ²⁾ PSWQ: Penn State Worry Questionnaire,

³⁾ NRS: Negative Rumination Scale, ⁴⁾ STAI-T: State Trait Anxiety Inventory – Trait

Table 4 各下位因子の記述統計量

	有効回答	平均値	標準偏差	最大値	最小値	最頻値	尖度	歪度
							統計量 (標準誤差)	統計量 (標準偏差)
①	199	13.82	4.60	24	4	13	.087 (.343)	.087 (.172)
②	202	13.59	3.33	18	3	18	-.370 (.341)	-.458 (.171)
③	198	14.46	5.04	24	4	16	-.626 (.344)	-.093 (.173)

Note: ①：脅威からの注意の転換の困難 ②：脅威への注意の促進 ③：脅威の探索

の間にそれぞれ有意な中程度の正の相関が示され、「脅威への注意の促進」との間に有意な弱い正の相関が示された。NRSは、「脅威からの注意の転換の困難」との間に有意な中程度の正の相関が示され、「脅威への注意の促進」「脅威の探索」との間にそれぞれ有意な弱い正の相関が示された。STAI-Tは、「脅威からの注意の転換の困難」「脅威の探索」との間にそれぞれ有意な弱い正の相関が示され、「脅威への注意の促進」との間に有意なごく弱い正の相関が示された。脅威モニタリング尺度全体では、VACS全体得点との間に有意な相関は示されなかった。また、脅威モニタリング尺度全体とPSWQ、ネガティブな反すう尺度との間にそれぞれ有意な中程度の正の相関が示され、STAI-Tとの間に有意な弱い正の相関が示された。

また、尺度得点の偏りを調べるため、各下位因子の記述統計量を算出した。その結果、「脅威への注意の促進」の合計得点の最頻値が最大値であること、歪度の絶対値が標準誤差の2倍より大きいことが示され、得点に偏りがあることが示された (Table 4)。

考 察

本研究の結果より、脅威モニタリングの3つの因子を測定できる尺度が作成されたと考えられる。さらに、脅威モニタリング尺度全体なら

びに各下位因子ともに十分な内的整合性の値が示された。そして確証的因子分析において3因子構造モデルを評価したところ、脅威モニタリング尺度の構造的妥当性が高いことが示された。

相関分析による構成概念妥当性の検討の結果、脅威モニタリング尺度の「脅威の探索」「脅威への注意の促進」とVACSの各下位尺度との間に有意な相関は示されなかった。また、「脅威からの注意の転換の困難」とVACSの「選択的注意」との間に有意なごく弱い負の相関、「転換的注意」との間に有意な弱い負の相関が示された。しかし、「分割的注意」との間に有意な相関は示されなかった。関連が見られなかった要因として、脅威モニタリング尺度で測定される注意の向け方には、VACSで測定することのできない注意の側面があることが考えられる。MCTにおいて、注意機能の柔軟性を向上させる技法に注意訓練法 (Attentional Training Technique: ATT; Wells, 1990) がある。VACSはATTで促進される注意制御機能を元に作成された尺度である。ATTで促進される注意制御機能は、内的な自己注目に対抗するための、中性的な刺激に対する注意の複数の方向性から構成されるものであるとされる。一方、脅威モニタリング尺度で測定している脅威モニタリングは脅威刺激に対する注意である。注意を向ける対象が異なることにより、VACSで測定される

注意と脅威モニタリング尺度で測定する注意では機能が質的に異なることが示唆された。

また、「脅威への注意の促進」と PSWQ, NRS, STAI-T との相関係数が、脅威モニタリング尺度の全体、「脅威からの注意の転換の困難」ならびに「脅威の探索」と PSWQ, NRS, STAI-T との相関係数に比べて低いことが示された。心配や反芻は CAS の構成要素の 1 つであり、脅威モニタリングとは自己注目という共通点があるとされている (Wells, 2009 熊野他 監訳, 2012)。また、脅威モニタリングの類似概念である注意バイアスは不安の増悪要因と示唆される (松本, 2006)。このことより、PSWQ, RRQ, STAI-T は脅威モニタリングと関連があると想定した。しかし、全ての尺度は「脅威への注意の促進」との間でそれぞれ有意なごく弱い ~ 弱い正の相関に留まった。そして、「脅威への注意の促進」の合計得点の最頻値が最大値であること、歪度の絶対値が標準誤差の 2 倍以上であったことより、得点に偏りがあることが示された。このことより、「脅威への注意の促進」因子の項目は、他の 2 因子の項目に比べて、より一般的な注意の向け方を反映していると考えられ、脅威モニタリングを測定できていない可能性が示唆された。

本研究では、精神疾患の維持、増悪要因とされる脅威モニタリングを形態ごとに測定する尺度の作成を行うことを目的としていた。本研究で作成された尺度は十分な内的整合性と構造的妥当性が示された。本研究で作成した尺度を用いることにより、脅威モニタリングが精神疾患に与える影響を明らかにすることが可能になると考えられる。しかし本研究の限界点として、再検査信頼性や構成概念妥当性の検討が不十分であったことが挙げられる。そのため、同一被験者に対する再検査信頼性の検討、思考抑制などの他の CAS を測定する尺度を用いた構成概念妥当性の再検討、ならびに神経心理課題や行

動指標を用いた構成概念妥当性の実験的検討を行うことが望ましいと考えられる。また、「脅威への注意の促進」因子の項目が脅威モニタリングを測定できていない可能性が示唆されたことより、脅威刺激に対する過度な注意の集中を表す内容に改訂を行い、改善していくことが必要であると考えられる。そして、本研究は健常大学生を対象とした研究であった。そのため、今後は臨床群に対しての調査を実施し健常群との比較を行い、臨床的有意性を検討する必要があると考えられる。

引用文献

- 朝野 熙彦・鈴木 督久・小島 隆矢 (2005). 入門 共分散構造分析の実際 講談社.
- Cisler, J. M., & Koster, E. H. W. (2010). Mechanism of attentional biases towards threat in anxiety disorder: An integrative review. *Clinical Psychology Review*, 30, 203–216.
- 今井 正司・今井 千鶴子 (2011). メタ認知療法 心身医学, 51, 1098–1104.
- 今井 正司・今井 千鶴子 (2013). 状況への再注意法 (SAR) が社交不安に及ぼす影響 日本心理学会第 77 回大会発表論文集, 314.
- 今井 正司・今井 千鶴子・金山 裕介・熊野 宏昭 (2011). 能動的注意制御機能のコンポーネントと臨床症状との関連 日本行動療法学会大会発表論文集, 37, 296–297.
- 今井 正司・熊野 宏昭・今井 千鶴子・根建 金男 (2015). 能動的注意制御における主観的側面と抑うつ及び不安との関連 認知療法研究, 8, 85–95.
- 伊藤 拓・上里 一郎 (2001). ネガティブな反すう尺度の作成およびうつ状態との関連性の検討 カウンセリング研究, 33, 31–40.
- 松本 圭 (2006). 情動ストループ課題とブ

- ローブ検出課題の関連 社会環境研究, 11, 203-216.
- 本岡 寛子・松見 淳子・林 敬子 (2009). 「心配」の自己評定式質問紙—Penn State Worry Questionnaire (PSWQ) 日本語版の信頼性と妥当性の検討— カウンセリング研究, 42, 247-255.
- 大友 和則・上野 真弓・松嶋 隆二・丹野 義彦 (2008). 高不安者における選択的注意と注意の解放の困難さ—ドット・プローブ課題を用いて— パーソナリティ研究, 16, 253-255.
- Schneider, W., Dumais, S. T., & Shiffrin, R. M. (1984). *Automatic and control processing and attention*. In R. Parasuraman & D. R. Davies (Eds). *Varieties of attention* (pp. 1-27). New York: Academic Press.
- 清水 秀美・今栄 国靖 (1981). STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版 (大学生用) の作成 教育心理学研究, 29, 348-353.
- 清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 田部井 明美 (2011). SPSS 完全活用法 共分散構造分析 (AMOS) によるアンケート処理 東京図書.
- Wells, A. (1990). Panic disorder in association with relaxation-induced anxiety. An attentional training approach to treatment. *Behavior Therapy*, 21, 273-280.
- Wells, A. (2006). Detached mindfulness in cognitive therapy: A metacognitive analysis and ten techniques. *Journal of Rational-Emotive & Cognitive-Behavior Therapy*, 23, 337-355.
- Wells, A. (2008). Metacognitive therapy: Cognition applied to regulating cognition. *Behavior and Cognitive Therapy*, 36, 651-658.
- Wells, A. (2009). *Metacognitive therapy for anxiety and depression*. New York: The Guilford Press.
- (熊野宏昭・今井正司・境泉洋 (監訳) (2012). メタ認知療法——うつと不安の新しいケースフォーミュレーション—— 日本評論社.)
- Wells, A., & Matthews, G. (1994). *Attention and Emotion: A Clinical Perspective*. UK: Erlbaum.
- (箱田裕司・津田 彰・丹波義彦 (監訳) (2002). 心理臨床の認知心理学—感情障害の認知モデル— 培風館.)
- 山形 伸二・高橋 雄介・繁枏 算男・大野 裕・木嶋 伸彦 (2005). 成人用エフォートフル・コントロール尺度日本語版の作成とその信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, 14, 30-41.
- 山口 摩耶・熊野 宏昭 (2014). トラウマ経験者における認知注意症候群に対するメタ認知的信念尺度の作成 早稲田大学臨床心理学研究, 13, 15-22.

Developing a Threat-Monitoring Questionnaire: An Examination of its Reliability and Validity

Makoto KUMAGAI*, Minori ARAKI*, Nozomi TOMITA*
Ayaka KURODA*, Tomoko HINUMA*, and Hiroaki KUMANO**

*Graduate School of Human Sciences, Waseda University

**Faculty of Human Sciences, Waseda University

Abstract

In metacognitive therapy (MCT; Wells, 2008), threat monitoring is one of the maintaining and worsening factors of mental disorders. Threat monitoring is defined as “attentional bias in the form of fixating attention on threat-related stimuli.” In previous studies, a self-administered measure for threat monitoring has not been developed. Therefore, the purpose of this study was to develop the Threat-Monitoring Questionnaire and examine its reliability and validity. The result of the factor analysis showed that the threat-monitoring questionnaire covers the following three factors: attentional search, facilitated attention, and difficulty in disengagement. A significant structural validity and reliability was shown for the entire questionnaire as well as for each of the three subscales. However, the following two limitations were revealed: the insufficient construct validity and the deviation of the score of facilitated attention. Therefore, some of the questionnaire items need revision, and the questionnaire needs further investigation.

Key words: metacognitive therapy, threat monitoring, attentional bias